

剪淞吟社史稿 その三

入 谷 仙 介

剪淞吟社前期の中心人物であった横山耐雪は、明治二十九（一八九六）年、二十九歳の時に、医学研修のために上京して以来、生涯に何度か上京を重ねているが、そのうちで、彼個人にとつても、吟社の歴史の上でも、もつとも重要な意味を持つのは、明治三十八年春、随鷗吟社の第一回大会に出席のための上京である。

随鷗吟社は、前年に、大久保湘南（一八六五—一九〇八）が、森槐南を盟主として創立した漢詩人の結社である。明治の三大家といわれて槐南と並称された国分青厓（一八五七—一九四四）、本田種竹（一八六二—一九〇七）も名を列ね、岩深裳川（一八五五—一九四三）、永坂石球（一八四五—一九二四）、野口寧齋（一八六七—一九〇五）などの一流詩人を擁し、榎本武揚（一八三六—一九〇八）、東久世通禧（一八三三—一九二二）ら、詩を愛好する貴顕名士が後援、全国各地に社員・準社員を拡げ、漢詩壇の中核ともいうべき大詩社であった。毎月、例会を開き、月刊の機関誌「随鷗集」を三十七年八月以来刊行、昭和十年代にまで及んだほか、三十八年を最初に、毎年の大会を開催、詩壇最大規模の詩会と称せられた。

耐雪は創立以来、準社員として加盟、「随鷗集」に投稿していたが、第一回大会を歴史的な集会と考えたのであろう、上京して参加したほか、主幹の湘南を訪い、槐南から、前年の松江来遊のおりにおける歓待に対する返礼として招宴を催され、大いに面目を施して帰郷した。随鷗吟社の大会については、「随鷗集」第八編⁽¹⁾に詳細な記事があり、その前後の同集に、在京中の耐雪の動静と、関係の詩が見える。また耐雪は、帰郷後、上京と前後の旅中の詩および、関係者の詩を集めて「東游吟稿」⁽²⁾を刊行、これらの資料によって、この時の情況を明らかにできる。

随鷗吟社は、多くの社員を集め、機関誌を刊行し、規約を有し、役員が存在するなど、きわめて整備された組織的な結社であり、のちに、剪淞吟社が組織を整備した時に、モデルとしたと思われる。また、剪淞吟社の幹部の多くは随鷗吟社にも名を列ねており、その関係は密接であつて、随鷗吟社の動向は、剪淞吟社にも、大きな影響を及ぼしたと考えられる。両吟社のこうした関係を作りあげるために、耐雪の随鷗吟社第一回大会参加は、いわばエポックメイキング

グ的な意味を持つ事件であった、ということができよう。

—

耐雪は三月六日に、汽船で松江を出発した。日登の自宅を出たのは、鉄道がまだ敷設されていない時であったから、一日か二日前であったかもしれない。「東游吟稿」巻頭の次の詩は、乗船に先立って、見送りの人々に与えたものであろう。

乙巳三月将之東京賦此留別 (乙巳三月将に東京に之かんとし

此を賦して留別す)

一夜春風春水生 一夜 春風 春水生じ

眼中景物近清明 眼中の景物 清明に近し

揚舡径欲摇摇去 揚舡 径ちに揺々と去らんと欲し

岸幘還宜緩緩行 岸幘 還た宜しく緩々として行くべし

芳草緑波南浦道 芳草 緑波 南浦の道

暖煙翠柳夕陽城 暖煙 翠柳 夕陽の城

元知此別無多日 元知る 此の別 多日無し

其奈酒醒分袂情 其れ酒醒めて分袂の情を奈んせん

船上の人となつて、次の詩がある。

六日発松江 (六日松江を発す)

離亭風笛裂新腔 離亭 風笛 新腔を裂き

断送詩人柳外艘 断送す 詩人 柳外の艘

千里遊行従此啓 千里の遊行 此れより啓く

春帆細雨古松江 春帆 細雨 古松江

首都までの一カ月ほどの旅に、第一句の悲壯感は誇張に過ぎるようであるが、鉄道の無い当時、山陰の一角から、東京ははるかかなたの地であった。

当時、関西・東京方面への旅行は、松江から小汽船で境港へ出、舞鶴・敦賀など、鉄道の通じている港へ向かう外海航路の汽船に乗換えるコースが好まれた。耐雪が乗ったのは敦賀行き立山丸³⁾であった。

舟過三保関 (舟三保関を過ぐ)

濯足長江万里流 足を濯う 長江 万里の流れ

大仙山色望中収 大仙の山色 望中に収む

回看鷗鷺旧天地 回看す 鷗鷺の旧天地

第一凌滄是此游 第一 滄を凌ぐは 此れ是の游

三保関は美保関、大仙は大山、船が美保関にさしかかるころ、大山は壮大な山容をあらわにする。天下の中央に乗りこむ、耐雪の心のたかぶりがひしひしと伝わる一首である。

篷窓夢覚東方已白偶然有作 (篷窓夢覚めて東方已に白む偶然

作有り)

怪底寒光照酒顔 怪底の寒光 酒顔を照らす

篷窓残雪越州山 篷窓 残雪 越州の山

誰知傷別傷春夢 誰か知らん 傷別 傷春の夢

猶繞湖樓剪燭間 猶お繞る 湖樓 剪燭の間

第二句から耐雪の乗った船が敦賀行であったことがわかる。第三四句、傷別の対象になっているのは、松江の詩友たちである。日登の里は、彼にとつては仮住居の思いがあり、ともに詩を語る友のい

る松江の方が、むしろなつかしい故郷であった。

上陸した耐雪は、ただちに東上せず、南下して、月瀬の梅里を訪れた。月瀬は齋藤拙堂の「月瀬紀勝」が世に出て以来、天下の梅花郷として喧伝され、文人墨客知名の土が、花時にはひきもきらず集まった。明治二十九（一八九六）年、本田種竹の月瀬の遊は詩壇の盛事とされた。⁽⁴⁾耐雪にとつても、梅花の季節にわざわざ出雲から花を訪うのは困難であるから、あたかも観梅の季節に、上京することになったのを幸い、日程をやりくりし、京都をさえ後まわしにして月瀬を訪うことにしたのであろう。

月瀬観梅（月瀬に梅を観る）

暝香吹過野溪浜　　暝香　吹過す　野溪の浜
竹外煙消疎影新　　竹外　煙消え　疎影新なり
古径青苔微貼月　　古径　青苔　微に月に貼し
断橋残雪淡生春　　断橋　残雪　淡く春を生ず
令人忽憶孤山路　　人をして忽ち憶わしむ　　孤山路
与我相逢姑射神　　我と相い逢うは姑射の神
好就酒家謀一醉　　好し　酒家に就きて一醉を謀らん
峭寒如水灑烏巾　　峭寒　水の如く　烏巾に灑ぐ
二首のうち第一首。孤山は中国西湖の中の島、梅花の詩人、林逋の隠棲の地。姑射神は藐如射山の神女、ここは梅花の精を意味しよう。

梅花の下で、日登の家を守る妻に手紙を書き、詩を寄せた。妻の名はでん、高等小学校を出ただけの学歴で、夫についてドイツ語を学び、看護婦代りに働いて、賢妻の名が高かった。同じく二首のう

ちの第二首を録する。

花下寄内（花下に内に寄す）

暗香浮動夢依稀　　暗香　浮動　夢依稀たり
万樹梅花玉打围　　万樹の梅花　玉打围す
遙想繡窓今夜月　　遙かに想う　繡窓　今夜の月
可無疎影上春衣　　疎影の春衣に上る無かるべけんや
繡窓は妻の居間の窓。

二

三月十日、耐雪は入京した。途中、月瀬に立寄って、足かけ五日というのは、当時の交通事情からして、まず普通の道のりといえるであろう。

十日入東京（十日東京に入る）

残衫破帽老書生　　残衫　破帽　老書生
不負江湖載酒名　　負かず　江湖　載酒の名
一路春風冷于水　　一路　春風　水よりも冷たく
梅花香裡入東京　　梅花の香裡　東京に入る
都門に入った耐雪は、自分が時勢に取残された田舎者になつてゐることを痛感するとともに、何がなしの気負いもわき立つた。耐雪がまず訪れたのは、恩師永坂石球のもとであった。当時、石球は神田お玉ヶ池の梁川星巖の旧居を玉池仙館と名づけて住み、中国風の調度を凝らし、文人墨客を集めていた。

訪永坂石球周二先生賦呈（永坂石球周二先生を訪い賦呈す）

玉池瘦格梅作骨

玉池の瘦格 梅を骨と作す

側帽怡立梅花月

帽を側けて怡立す 梅花の月

夜深閑読蕊珠經

夜深けて閑に読む 蕊珠の經

香風詞海送宝筏

香風 詞海 宝筏を送る

十年重訪詩龕梅

十年 重ねて訪う 詩龕の梅

暗香漠漠吹古苔

暗香 漠々 古苔を吹く

繪事は君閑公事

繪事は是れ君の閑の公事

領略竹外斜枝来

領略す 竹外 斜枝来たるを

二十九年に医学研修のため上京して以来、始めて訪う恩師の宅であつた。その書齋を祭詩龕と称する。石球は詩書画三絶と称せられ、横山家の周辺には、今も石球の小品画の類を所蔵する者がある。

三

耐雪の上京に先立ち、藤脇松軒が、江木冷灰（一八五八—一九二

五）主催の檀樂会に、荒川凶南に件われて、姿を見せている。

二月二十六日、神田淡路町の江木邸で、檀樂第二十九集が開かれた。会する者は、森槐南・永坂石球・塚原夢舟・岩溪蒙川・関沢霞庵・上夢香・大久保湘南・阪本蘋園・凶南・松軒のそうそうたる顔ぶれである。湘南と松軒とは、十数年前の旧知であつた。

詩会の通例に従い、主人冷灰の原唱が提出される。

一樽春話旧 一樽 春に旧を話し

萍梗跡相同 萍梗 跡 相い同じ

芳草無辺雨 芳草 無辺の雨

落梅何処風

落梅 何処かの風

詩能輕万戸

詩は能く万戸を輕んじ

氣可傲三公

氣は三公に傲るべし

莫道塵寰事

塵寰の事を道う莫かれ

青山在夢中

青山 夢中に在り

湘南の評に、「芳草落梅一聯俊逸にして清新を兼ねと謂ふべし」諸家すべて和詩のある中で、松軒の作は次の通りである。

開尊群笑出

尊を開けば群笑出で

吟坐主賓同

吟坐 主賓同じ

修竹雕牆雪

修竹 雕牆の雪

梅花画幀風

梅花 画幀の風

句何生熟秘

句は何ぞ生熟の秘なるや

評自是非公

評は自らは非の公

不道春寒峭

春寒の峭なるを道わず

深杯在掌中

深杯 掌中に在り

湘南の評に「何ぞ其流麗なる」と。

「酒酣にして耳熱し」一座が盛上つてきたころ、冷灰がまた絶句一首を作つて、座客に唱和を乞うた。

竹は檀樂盟可尋

竹は是れ檀樂 盟は尋ぬべし

江湖風月白鷗心

江湖の風月 白鷗の心

盤無兼味令人瘦

盤に兼味無く 人をして瘦せしむ

唯有此君留客深

唯だ此君有りて客を留むる深し

後半、ろくな馳走もなく、もてなしは、此の竹だけという、客へのあいさつである。これにも客たちが唱和した中に、松軒の作もあ

る。

佳句唯当醉裏尋 佳句 唯だ当に酔裏に尋ぬべし

梅花含笑影盃心 梅花 含笑 影盃の心

歎情一夜湛如水 歎情 一夜 湛うること水の如く

可与茶溪較淺深 茶溪と淺深を較ぶべし

茶溪は中国湖南にその川があるというが、ここはお茶の水の谷をさすか。

詩会の最後を柏梁体聯句二巡でしめくり、宴がはてたのは午前零時に近かった。聯句の起句は冷灰で「竹葉之酒看雲斟（竹葉の酒は雲を見て斟む）」以下、裳川・凶南・蘋園と回り、松軒の番となつて「相逢一往感情深（相い逢う一往感情深し）」とつけた。以下、夢香・霞庵・夢舟・欣々（冷灰夫人）・石埭・湘南・槐南、ここでまた元にもどつて、同じ順序で松軒の番になり「但道金樽樂不淫（但だ道う金樽樂しみて淫せず）」槐南の「静意有余未罷琴（静意余り有りて未だ琴を罷めず）」の句を止めとして、聯句は終る。

松軒は公務で上京したのであるから、長く滞在できず、耐雪には会う機会がなく、随鷗吟社の大会にも出席しなかつた。しかし、檀樂会出席の事実から、東京の詩壇でも、十分に通用する顔であつたことが知られる。

四

日時は未詳であるが、向島の大久保湘南の家を訪れたのは、次に述べる八百松楼の招宴よりは先であろう。

春浅いある日、安広龍峰¹¹が、当時、まだ珍しかった自転車に乗つて、湘南の家を訪ね、懷中から連環体の詩を出して示した。連環体というのは、尻取り式に、前の詩の結句を起句として詩を作り、最後に第一首の起句を結句として終る、一種の遊戯詩で、当時、渡辺無辺¹²の作が評判になつていて、唱和する者が多かつた。龍峰も無辺の作に次韻したもので、市外に隠棲する湘南の高風をたたえる意を寓しており、湘南は「詩中云ふ所、溢美敢て当らずと雖も、其愛才の盛意、豈感佩せざるを得んや」と恐縮している。そこへ居合わせたのが耐雪で、さつそく韻を借りて、途上の所見を連環体三首にまとめた。

帘影青揺旧酒家¹³ 帘影 青は揺る 旧酒家

欄干曲曲有花遮 欄干 曲々 花有りて遮る

新晴僅放藤蕪雨 新晴 僅に放つ 藤蕪の雨

一路春風油壁車 一路の春風 油壁の車

一路春風油壁車 一路の春風 油壁の車

柳煙澹蕩隔塵譚 柳煙 澹蕩 塵譚を隔つ

夕陽紅逗古僧閣 夕陽 紅は逗る^{もとお} 古僧閣

照出寒梅四面花 照出す 寒梅 四面の花

照出寒梅四面花 照出す 寒梅 四面の花

波光上下槩枝斜 波光 上下して 槩枝斜めなり

春風何処堪沾醉 春風 何処ぞ 酔いを沾うに堪うるや

帘影青揺旧酒家 帘影 青は揺る 旧酒家

龍峰がさらに疊韻したあと、三人相い携えて、百花園へ梅見に行くことになった。早咲の梅は、散りかけてまだ散らず、遅咲きの梅は、まさに満開で、ふくいくたる香りが園中に拡がっていた。座間にかかる祇園南海の詩幅に次韻することになり、耐雪の詩がまず完成した。

林隙夕陽逗⁰⁴ 林隙 夕陽逗り^{もとお}

輕煙如相親 輕煙 相い親しむが如し

玉釵斜欲墮 玉釵 斜めに墮ちんと欲し

嬌鬢微啓唇 嬌鬢 微かに唇を啓く

非遊象香国 象香国に遊ぶに非れば

誰解花中真 誰か花中の真を解せん

春風林下夢 春風 林下の夢

相遇是美人 相い遇うは是れ美人

明治詩の一面たる艶麗な作品、玉釵、嬌鬢はいずれも梅花の形容、尾聯は高啓の「梅花」の詩の「月明林下美人来（月明の林下に美人来たる）」にもとづく。原詩は、羅浮山の梅の精が、美女に化して現れたという故事。龍峰がこれに和して二首を作り、湘南が、連環体三首を作って、その日の遊は終った。

五

三月二十一日春分の日、耐雪は森槐南から向島枕橋の八百松楼に招かれた。十三日後に随鷗吟社の大会の開かれる、東京一流の旗亭である。会する者、永坂石埭・矢土錦山・江木冷灰・岩溪裳川・

田辺碧堂⁰⁶・手島海雪⁰⁷・菊地惺堂⁰⁸・内野皎亭⁰⁹・大久保湘南の九名、石埭が詩壇の長老、かつ耐雪の恩師であるほか、すべて名家である。主客合わせて十一名。

この招宴の主旨について湘南はいう。「耐雪は出雲の人、往歳先生（槐南）の松江に官游するや、耐雪本地の同人と偕に周旋頗る最むと云ふ、乃ち知る先生此醜^{しやう}を設くるの意、耐雪を京国の詞壇に紹介し、且つ其当年の好意に酬ゆるに在るを」⁰⁴

槐南は律詩二首を席上で賦した。その一は次の通りである。

不多幽賞貴招携⁰¹ 幽賞を多とせず 招携を貴ぶ

一笛高楼望転迷 一笛の高楼 望みて転た迷う

吹得落梅翻作雪 落梅を吹き得て 翻りて雪と作り

飛来乳燕尚銜泥 飛来の乳燕 尚お泥を銜む

酒鱗缸面紅旋湧 酒鱗 缸面 紅 旋ち湧き^{たちまち}

草甲裙腰緑略斉 草甲 裙腰 緑 略ほ斉し

興到方知春意厚 興到りて方に知る 春意厚きを

空濛煙景讓人題 空濛たる煙景 人をして題せしむ

この日の実景である。当日、朝からの雪がやがて雨に変わり、午後に及んでようやくやく晴れた。其の二は次の通りである。

化工戲罷夕陽新 化工 戲れ罷みて 夕陽新に

楼閣空中捉幻塵 楼閣 空中 幻塵を捉う

水月鏡花非剪綵 水月 鏡花 剪綵に非ず

風裘雪帽亦嬉春 風裘 雪帽 亦た嬉春

山陰祓禊蘭亭遠 山陰の祓禊 蘭亭遠く

江左文章玉樹親 江左の文章 玉樹親なり

安得群賢畢乘興

安くにか群賢の畢く興に乘じ

碧雲采來權淞濱

碧雲を采り来たり 淞浜に權するを得ん

前半は当日の実景、後半について湘南は「専ら山陰の旧飲を叙し、懐を碧雲湖上に聘す、意うに翦淞吟社の諸子、亦当さに望雲の念有る可し」という。すなわち二年前、剪社創立大会の盛宴をしのいでいるのである。第五句は王羲之の蘭亭修禊の故事、山陰は蘭亭の所在地会稽（紹興）の一名、剪社の所在地松江が山陰道に所在し、かつ旧暦と新暦との違いはあるが、蘭亭修禊も、剪社創立も、たまたま三月に催され、多数の文人の集まつた行事であつたため、借用したものである。

以下、参会者から、次々に詩が出された。

花時欲近歲時違

花時 近からんと欲して 歳時違ひ

三月奇寒上我衣

三月の奇寒 我が衣に上る

狂絮隨風相和乱

狂絮 風に隨いて 相和して乱れ

落梅帶雪一斉飛

落梅 雪を帶して 一斉に飛ぶ

玉鈎簾映鳥金水

玉鈎 簾は映ず 鳥金の水

青紵旗搖白鷺磯

青紵 旗は搖る 白鷺の磯

此地從今春色好

此地 今より春色好し

山陰詩客莫言歸

山陰の詩客 歸るを言う莫かれ

江木冷灰の作。尾聯は、これから東京は春景色がよくなるから、ゆつくりしていただきたい、という耐雪へのあいさつである。

雪霽輕雲漏日痕

雪は霽る 輕雲 漏日の痕

深深簾幕篆香温

深深たる簾幕 篆香温し

蔚藍春水漲為色

蔚藍の春水 漲りて色を作し

噤瘁桃花寒不言

噤瘁の桃花 寒に言わず

当代方逢斯道盛

当代 方に逢う 斯道の盛んなるに

我心好与故人論

我が心は好みて故人と論ず

最欽静者蔡侯意

最も欽す 静者 蔡侯の意

置酒江東月入門

江東に置酒すれば 月は門に入る

岩溪裳川の作。第七句蔡侯意は、つまびらかでないが、後漢の蔡邕が、後輩の王粲の訪問を喜び、履物をさかさまにつっかけて、いそいで出迎えた故事か。裳川は耐雪より十三歳の年長であるから、みずからを蔡邕に、耐雪を王粲に比したものである。

雪後開樽寒較輕

雪後 樽を開きて 寒は較や輕く

簾衣斜接綠盈々

簾衣 斜めに接して 綠盈々

相思昨夜梅花落

相思 昨夜 梅花落ち

未說離愁春水生

未だ説かず 離愁 春水生ず

与我破禪空即色

我と禪を破す 空は即ち色

故人能醉聖之清

故人 能く酔う 聖の清

東風吹面蕪蕪暗

東風 面を吹いて 蕪蕪暗く

長笛隔江時一声

長笛 江を隔てて 時に一声

田辺碧堂の作。故人能酔というのは耐雪を指すのであろうが、実は耐雪はさほど酒量は多くなく、酒席の雰囲氣を楽しむ方であつたという。碧堂は興さらに尽きず、二絶句を重ねた。碧堂は絶句碧堂の別名があり、絶句の専家として知られる。

其一

其の一

髯仙折簡試吟行

髯仙 簡を折りて 吟行を試み

笠屐江東共聽鶯

笠屐 江東 共に鶯を聴く

未許人生容易老 未だ許さず 人生 容易に老ゆるを

梅花細雨滞春城 梅花 細雨 春城に滞る

髯仙は槐南のことか。みごとなひげを鼻下に蓄えていた。髯はおひげであるが、ひげの総称として用いたものであろう。

其二 其の二

中年興会緑樽前 中年の興会 緑樽の前

春到江南書画船 春は到る 江南 書画の船

生作詩人身分好 生まれて詩人と作れば 身分好し

梅花雪後杏花天 梅花の雪後 杏花の天

最後に耐雪が詩を出した。

旧夢春愁醉後生^④ 旧夢 春愁 酔後に生じ

当年本事記分明 当年の本事 記して分明

并刀剪水江干過 并刀 水を剪りて 江干を過ぎり

剡棹戴詩湖上行 剡棹 詩を載せて 湖上を行く

一代雄才推太白 一代の雄才 太白を推し

千秋妙賦慕宣城 千秋の妙賦 宣城を慕う

旗亭勝会重修禊 旗亭の勝会 修禊を重ね

三月東風劇有情 三月 東風 劇だ情有り

旧夢、当年はいずれも槐南の雲州の遊を指し、江干は向島で現在の情況、湖上は宍道湖で往年の遊、太白(李白)・宣城(謝朓)はとも槐南であろう。第七句、今日の八百松での宴は、かつての松江での集いに勝るといふ、あいさつの言葉。東京の諸大家に伍して、少しも劣らぬ力量を示す。

記録者湘南は、詩二首があった^⑤。宴に侍る校書(芸妓)たちが、

たくみに酒をすすめ、詩興と酒興に陶然として酔い、一同が帰路についたころには、雲は全く晴れて、隅田川の水面は月光に輝いていた。^⑥

注(1) 明治三十八・五・五刊行。

(2) 明治四十一・五・十六刊行。境港市立図書館蔵。

(3) 明治三十八・三・六付山陰新聞。当日境出港の外航客船は他に無い。

(4) 正岡子規「松蘿玉液」。

(5) 一八六二—一九二七。本名義太郎。当時長崎県知事として松軒の上司であった。のち横浜市長、貴族院議員。松軒は図南に詩才を愛され、松江市奥

谷町の藤脇家には、図南から贈られたという「哀隨園集」を今も所蔵する。

(6) 生没年未詳。

(7) 一八六四—一九二五。

(8) 一八五一—一九三七。

(9) 一八五七—一九三六。本名鈺之助。永井禾原の弟、荷風の叔父、作家高見順・詩人阪本越郎の父。当時福井県知事、のち名古屋市長、枢密顧問官。

(10) 湘南が松軒と出会ったのは新潟。随鷗集第八編に、その時の松軒の作「舟江早秋」を載せる。舟江は新潟の雅名。

(11) 生没年未詳。

(12) 一八四六—一九一九。その連環体は随鷗集第六編(明治三十八・三・五刊行)に掲載。無辺が湘南に、吟社協賛員として入社を申しこんだ時の手紙に同封してあり、のち東京日日新聞に掲載されたという。

(13) 以下詩は、随鷗集第七編(明治三十八・四・五刊行)。東游吟稿には連環

体を収めない。

(14) 随鷗集は題を記さない。東游吟稿は「同大久保湘南安広龍峰両詞宗観梅于百花園次壁上詩幅祇南海韵(大久保湘南・安広龍峰両詞宗と同一梅を百花園に観、壁上の詩幅祇南海の韵に次す)」

(15) 一八四九—一九二〇。この席で詩は無く、席上詩巻の書後を東游吟稿に収める。

(16) 一八六四—一九三一。

(17) 一八五九—一九〇七。東游吟稿に当日の詩一首を収める。

(18) 一八六七—一九三五。吟稿に当日の詩一首を収める。

(19) 一八七三—一九三四。吟稿に当日の詩一首を収める。

(20) 随鷗集第七編。

(21) 以下、随鷗集第七編。随鷗集は題を記さない。東游吟稿によって題を注記する。「乙巳春分八百松楼即賦是日忽雪旋晴光景莫測因呈席上諸公兼贈山陰横山耐雪(乙巳春分、八百松楼に即賦す。是の日、忽ち雪、旋ち晴れて、光景測る莫し。因りて席上の諸公に呈し、兼ねて山陰の横山耐雪に贈る)」

(22) 東游吟稿「乙巳三月念三槐南先生招飲横山耐雪及同人于江東旗亭賦此乞正(乙巳三月念三、槐南先生、横山耐雪及び同人を江東の旗亭に招飲す。此を賦して正を乞う)」念三は念一の誤り。

(23) 東游吟稿「乙巳春社槐南先生招飲同人于漫上八百松楼頃日出雲横山耐雪入都先生為東道之主以開此勝会予亦陪末次韵率賦(乙巳の春社に、槐南先生、同人を漫上八百松楼に招飲す。頃日、出雲の横山耐雪都に入り、先生為に東道の主たり。もつて此の勝会を開く。予も亦た末に陪し、次韻して率に賦す)」

(24) 東游吟稿「八百松楼清集席上賦此(八百松楼の清集、席上に此を賦す)」

後の二絶も同題。

(25) 東游吟稿「酒間話剪淞旧事又賦一律(酒間に剪淞の旧事を話し、又た一律を賦す)」又というのは、その前に吟稿では「春分森槐南先生招飲八百松楼席上次韻(春分に森槐南先生、八百松楼に招飲さる。席上韻に次す)」の二律があるからである。

(26) 随鷗集には無く、東游吟稿に収める。

(27) 当日は旧暦の二月十六日。

付記 昭和五十七年度に、私は「剪淞吟社の研究」で、文部省科学研究費の助成を受けた。本稿はその成果の一部である。